蕉風談拾遺

863
90

国立国会図書館　タイトル『蕉風談 2巻』 請求記号 863-90

ガラス使用

和露文庫

863-90

蕉風談拾遺

蘇室久安述

一一串居士の焚餘雜記巻の二ふ曰俳諧ゝ
俳諧ゝ詩ゝ出たるもの
詩の贈答ゝ古へよりの事なれども唐の元
白元稹白居易のごとき殊更盛んなり
ゝ一首の詩を作りて贈答ゝ唐人
たるゝ雖ども一時の應酬ゝ及ひたる韓
愈ゝいたりて初ゝ聯句ゝいふ事をもて始め

たゞ是は明友両三人も寄合て十六句二十句などの排律の詩を作るなそれの詩ハ韓文にあれ共もつに畧れその一坐の勝會にも右様の事も澤山にあれ侍れどもその人の詩文世に珎重せらるゝほどの人にてもなくよしやまた大先達なりと雖も他の出逢面白からざる人なれば碔砆（玉と石との交りなるをいふなり）の混雑にて一時の勝會にはあらでなかるべくされども壽梓して後世にのこれるに至るまじ故に諸家の詩集

にも多くのせはべりし事の見る所にしては明の高季迪の集中にのせし數首などの如きハ格別のものにして面白しその他唐白虎祝枝山との牛石の聯句なども格別のものなりまた東坡佛印との聯句もあれど　蕉翁曰黄奇蕪新にあらざれハいへり

そもそも黄ハ山谷蕪ハ東坡なりその奇新をまねびしによりこゝろなるべし蕉翁の俳諧ハたゞ俚言に戯むれたるのみにあらずこゝろのいてハ東坡仏印の場よりにはふけるに後の俳子俚言のうへにをとりこゝろも俗にもちかれハ更に見る所なし蕉翁の高調ハたゞこゝろにあらで文字のうへにありけれハ第二義なるをもつてれ俚言のうちおのおのうへ高調を生じけるもの也またこゝろよむ人のうちにもしらべのうるはしくこゝろの俗なるをたゞ雅をなさんとす　錦のうつみしもを

著〻口聖人の語を咏〻〻〻〻〻私欲のみ〻〻〻芝居役者のやうなるふめて〻俳諧ふも一種〻れをそふ流弊あるを〻〻〻〻〻〻蕉風総て知已のもれよりの俳諧なるべきなるべし

合て排律よりも律詩絶句ふ至れるまでの詩を作る事を聯句ふ〻言へども律詩絶句ふ〻某所南澗聯句石林聯句虎卯聯句なる〻題ふあるなり の聯句ふ〻云題ハ書ものき事ふ見えたるをれを聯句ふ〻云もれハ排律體のなる〻見えるり聯排ふ〻いふ所きの古く入唐の輩も皆その佳會を見覚えたる事ふ見えて古ハ

朝廷ハ試みふも聯句なるの事も有

一趣ふ朝野群載ふも挙源氏物語ふも見えたるハまふ覚えるなるあるハ文字の道なる中古の時ふ皆湮没〻〻〻の道ハ〻〻〻ハ〻〻文献なる〻〻〻〻〻〻賢者達の有〻文章をそ後の世ふハるる事の後世ふ至りて天龍寺の策彦なるりしをそふ

長老聯句の事を始て傳へられたるハ是より以前の聯句ハ皆一坐の勝會と見えるりふ至りて始め〻〻屡々首中拾式をハ〻められたるもの〻見えたり

省中を禁中也ふ名をハ〻〻御會のあれよりふ鳳城聯句〻称せるもれハ世ふ傳ハるを此聯句の式ハ彼古人

の聯句なる事うそをつくあるひは百韻聯句は五言ふ
くさらくさ五字城と名付く隔句ふ韻脚をふむゆゑよ
十八韻なれは三十六句となる百韻くらへは二百句の事也
あるひは百五十韻難韻なれは五十韻もあり唐人
韻字を用ふる故ふ百韻五十韻と申なりまた蕉翁
素堂漢和の歌仙は漢字詩の如くなる故三十六韻なる
べくべく可也今の百韻五十韻はみな和字なれは韻は
なきゆゑなれとも百句五十句とはいふなり
惣くく初二三四五六七八句を表なくく此
句中はくくの時節の句を付なくを結尾の両句を
會集の趣きなくくその中間の句なを四季を論
ぜし對なくなりなくと云く太嫌のあれよく人物

氣形地理物名は八句太なくを且その對句なくは
なるくも古人の對偶なくを事うそをつくなく字の
格を以く對なくを此本意くなくなるよく世ふ行る
三重韻なくはくも此對偶の為なく策彦の
定先置なく由なくを今日に到なくも五山風
ふを此聯句式はくふ行なくなれなくを付なく此聯
句鳳城なく流行なくの折柄ふ松永貞徳も其
意ふなくなくひく和字ふく聯句を定められ
なく見えなくを時ふよくれを漢和くく聯句の中

み和句のやうにまぎれたるもあり和句のうち
に漢句にまぎれたるもあり漢和混用の出
来るかぎりは韻字を脚やうにする事分明なり今の
連歌みな韻脚の有無はさしてもその取
捨定格の摸様は聯句同様の事なり尤聯句
よりも出たる事や見えたりさあれば連歌俳
諧やいさゝか聯歌排諧や称するもさり貞徳
以来の連歌みな聯詞にまぎれ故ふ聯歌排諧ふも
らされば叶ふまじ蕉翁のは俚言ふ戯れ世俗の
らへたる雅心なれば俳諧
連歌やうにぶぶにまぎれ俳優の諧合みなあり

蕉翁は俳優の諧合の上ふ詞をもちる通詞なり故ふ
詞は畢竟無茶苦茶こゝろのおもむく所隠逸道心おもみ
排律の體を學ひ得たる諧合なれはなり禁中
みな御樂始め御會始めやうに和歌の御會始
催はるゝふよりゝ營中みなを一等をくゝ
て御能始め連歌始めやうに遊をはもてよりは豈俳
優の諧合を以て御祝儀の始め事やなるけ
むや蕉翁の俳諧俳優の諧合なれは仕官に名利を
豈のゝむ事をなれはんやたゝ隠逸道心癖子
の樂しみを樂しむを能も猿樂なれを狂言もあと
本意やはるかり
やうに三番叟翁なるは決して狂言あるなる

神樂の一等時代きたるものなれいあるはたを
いとゝ此聯句、聯歌の式を尤定格おくられ
たるもれおゝ決しゝ面白き風韻の出
来たるものあゝはたゞわのはたゝ世間て
聯句を流行せる事たゝ蕉翁の無格ゝ妙あるを
を立るおくれ所作ゝ不知後世俳諧ゝ定格
言語ふたゝゝる愚ゝいとゝふ五山流の人たゝり
古へよりの古格ゆゑやむ事ゝ得ゝはもちひき
たる事たゝはもたの外誰もゝれを學ふ人い
たゝるとゝ和句おゝゝゝれを見ゝを同様ゝ

事おゝ推情の真面目いひ出せる事うたゝ
定格なれい故ゝ蕉翁一筒の識見を出ゝゝ法
格を一洗脱去ゝゝ他の學者既おゝゝ蕉翁の無格をいゝ其道の人何そ
さゝゝゝれをさゝゝゝゝ別有天桃花流水杳然去別有天地非人間ゝゝ李白の句より一
種格別の心培ゝゝゝゝ一線の妙培自得の附肌也を以ゝ
聯句の神通縱横自在無格の躰たりを得たる事明白見
證ゝゝ蕉門ゝ心たゝき他の學者理の上ふゝゝ無格を見ゝ見證ゝゝゝ教ふ蕉門の人い
ゝ見證せゝゝたゝれふ漢和混用の事策彦の時
おを大ふ流行の事ゝ見えゝ洪覺範宋朝の高僧ゝゝ文字

国立国会図書館　タイトル『蕉風談 2巻』 請求記号 863-90
ガラス使用

のちまであまりあるやうに妙境の所ゝいうう
たくさんや金山の傳燈を得る事あるとそなりそひく
文字をたゝあゝ石門文字の一ゝ瀟湘の八景を詩て
禪數十卷をあゝらせり
作ゝ有聲の画ゝ宋迪ゝ無聲の詩と所望
せられ事をまねひく近江の湖水ゝの八景
をうつむるあゝ近江八景ゝ名付ゝ策彦
ゝ詩を作ゝられゝ和歌もありまゝ
主上の御製ゝ漢和八景の御屏風ゝ御所ゝ
あゝゝ今もその學ひゝ見えゝ立山泉の寺
院ゝ吾屏風ゝ漢和八景ゝ八枚屏風の小

ゝ上の色紙ゝの
下に画をうつきゝ上の色紙ゝの
策彦の詩ゝひゝ和歌ゝ二枚を張漢の屏
風ゝ色紙二枚ゝ洪覺範の律詩四句ゝ書
く張ゝ見ゝ事あゝ此等ゝ漢和一體の
ゝひゝゝ聯句盛むゝ折柄和ゝ又
聯歌を仰せゝゝ和ゝ漢和混用の御
時もあゝ事ゝひゝ

あゝ山猿の法こう栗は錄　小五郎

茶敦く二日おゝ拂ぬ世をうれ

正秀曰あゝ山を少年の句ゆゝしき風

情あり花散くい悪功の入る所見えく少年

の句をいひ申　去来曰二日おゝ拂ぬふる

ゝあゝう他流の句ゆゝ蕉門のいとく嫌ふ

所なれゝ

今蕉門の人二日おゝ拂ぬをのけゝ句

のゝ中ゝさる人多く見ゆ

一草庵の席上餐應を感じ

ゝ蓼の淋しき味をゝるこゝ　芭蕉

ゝの能ふ住ひく秋うせゝ行るゝ夕

ゝ行友をゝの方へ行ゝ

みのむし行ゝ秋ゝ行ふ　日

ゝれを深く味ひゝされい蕉門の後ふ

ゝゝゝ

一芭蕉談美濃の落梧ゝ瓜畠集を出し侍ゝ

ゝ師のゝ句ゆゝ歌仙一巻をけゝ載侍ん

国立国会図書館　タイトル『蕉風談 2巻』 請求記号 863-90
ガラス使用

さいひ翁の曰我も集作らんと巻をなし
たる事なしむかしい撰集あるやうに歌をよみ
し人あり我俳諧をそれに異なり云云いつれも
故をやいつ人か答へ曰千載集の撰出来なり
やうに西行の見にくやうにらせたるを途中人か
逢へ
こゝろなき身にもあはれは知られけり
しぎたつ沢の秋の夕暮 西行
此うた集あるやや問ふれをなしやや答へ

侍るそれはその撰集見るにおよばざるを
きこゆるされたるもまたあるなれ
ども西行の蕉翁をして西行の場に
あるを撰集を見あるもまた西行よりも
うちあるむかのこゝろをよく味
ひたまへ

一同書

格を中昔の格やいつ契沢問ふ人に
答へ曰

後撰和歌集秋のうたの中より

あきのころひあるに所ふ女ものあ
また簾のうちふ侍るをとこのうた
のうちをいひいれ侍られたるうた
ちよう　上の句ふ未とも
下の句をるを

讀人しらず

きりぎりすのなくふあさまの所をわた
されのいろ〳〵あるをみるに
うた〳〵連歌をもまぜる

古今和歌六帖第四戀の部ふ

紀友則

たまぼこせふうにそなるのねをあはせる
人のまてるをいろ〳〵をまぜ
あはうほのきたのこゝろをふる

右ふ所〳〵やうなる事あ八句有

あのそらにたなびく

そのうちに月にひとりもあるる

右あと所〳〵やうなる事九句有

まこつみの浦は菜をたかきすかしも　紀貫之

これもあと八句有

松のつらなれるも

またうみめしなきこのはてうたゝかしも

これもあと九句有

金葉集第十雑連歌之部

ゐなかのそれ所の北の方ア侍り
なまめきたる人は物いひけるをきゝて

あつまうとのこゑこそきたにきこゆなれ　永成法師

みちのくによりこしにやあるらん　律師慶範

これらもこのやうなる連歌多く有て
みな一首のうちにあり此金葉集の頃
をはしめて中昔といふなり
蕉翁格は中昔をいひたまふて我俳諧を無格
なりやといふ事ありもしろくいひたまひし
それはなれはし見たまへ中昔なるはしき
侍る連歌をなをきかめ

附録

蕉風附肌の根源を心地以て心を傳ふるみさを理や物や一切ふたつのそなたその枝葉を深きふもあり浅きふもあり遠きもあり近きふもあり強きふあり弱きふもあり枯のたうなれ天然一種の法格ゆゑ古人その枝葉を強く

名附く句ひうたを位ひ紀行ひうけなを
いふなるなるそなたの枝葉ふやゝたゆゝく
たるねふ根源ふたゆゝ入このちなを歎さ
たまゝの名目を捨ゝ前句の情を知て無
意ふ句を發ゝ感合をたふふゝ蕉
翁の教へたまふる則根源天然の法則自
然ゝ心印やゝゝむるみちひきなを
その前句ゝ情をゝふ道あり眼ふ發ふ
る句や耳ふ發る句や鼻ふ發る句

国立国会図書館　タイトル『蕉風談 2巻』 請求記号 863-90
ガラス使用

や味ひよりと發する句や情より發する句や
心よりと發する句や有のみ此六つのもとよ
りいでたるものにて事理いつれもそなはる
更ふ他の文學技藝唯此一身のうをゝく
万事萬應なるべしその根源は心よりとみ
るべき時は鼻よりうゝ耳よりきゝ眼より明
らかに舌よりゝ味ふ情よりゝ通ずるなれば
さればこゝろのよく静かなるをこれ先とする
のみにて一巻のうへに変化をあらはすべし

のゝやうにいろいろとまちまちのはたらきをな
すべし商賣往来町盡しゝ國盡しゝみな変化ある
べしはやくなれば文字のうへに変化を思ふ
ゆゑに氣ふやうにかゝるのをみるべきの事
なるべしやくを一日のうへ朝より暮ふいたる迄
唯眼耳鼻味情心のもとゝきゝかるゝ
ごとく変化しゝあるべし其うれたるみな
無意よりと發する蕉翁の附肌おもしゝ事
なるべしをやくはやるべしゝゆゑに此心外物

よくれぬやうに静養有るべしけるに今まで
いたづらにその枝葉のみ繁きあれども遠き近
きうたをきくにうたぬるき弱き
みほひひきうたを位面影甚しきを一句
のうへに躰や用と成るもの所に入こと
事ふうに迷ひ根源の所に入こと
をせずして何をか蕉風の俳諧やらく
そんや蕉風を附肌の要名て天然の法則
自然の心印をそれるのみにして文字

を畢竟第二義に落るなれば甚天然の
法則自然の心印をはづして是を第一義とす
蕉風附肌を頭脳にいれるて丈草法師と
ともに幾さ言語の俳諧にあらざるの
俳諧也やうにたとへて
蕉門の俳諧をはづして一字一句の小道にあ
らざるこをよくはづして自性の本躰を明
らめ柄手にある安楽境の樂しみ成
ちなるべきなるべし自得自得

国立国会図書館　タイトル『蕉風談 2巻』 請求記号 863-90
ガラス使用

863
2
90

14153

蕉翁自有蕉翁之心事蕉翁豈有蕉風之
可傳哉
慶應元年初冬

東塢亭藏梓

三千三止

国立国会図書館　タイトル『蕉風談 2巻』 請求記号 863-90
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『蕉風談 2巻』 請求記号 863-90

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『蕉風談 2巻』 請求記号 863-90

ガラス使用